

石屋のイロハ(6)

第6号(夏号)に紹介させていただいた磨きに付いてもう少し書かせていただきます。

私が石屋を継ぐため見習(弟子)に行った頃(昭和43年)ようやく、石屋にも機械化が始まって来た頃でした。

石を切る、石を磨く、石を削る、文字彫りなど、石を磨くとは前回の号にも紹介させていただきましたが、多くの時間と根気と長く培って覚えた技が必要です。古代の人の宝物(装身具の一種)である勾玉(まがたま)、それも大変硬い翡翠(ひすい)の勾玉はまだ満足な道具も無い時代にあそこまで精巧な形に作り上げ翡翠本来の価値を引き出すために磨き上げた技は現代の石を磨くそれに通じていると思います。

石を磨き光沢を出す技は古代も現代も変わらない。変わっているのは砥石の質と機械の導入と進歩だと思います。石を磨く基本は同じ磨く石の面(つら)の凸凹を1番荒い砥石でなくす(すりおろす)。その荒い砥石のスジを次の砥石ですりおろす。その工程を8回繰り返す。

砥石の種類は80・100番(荒番)、200番、400・500番、800番、1000番、2000番、3000番、バフ(ツヤ砥石)が有ります。番数が大きくなると砥石のスジは細かくなります。

最後には人の目でも見えないくらい細かなものになり鏡の様な光沢が出るのです。どの番数の砥石も飛び越す事は出来ません。そして前の砥石のスジを残したまま次に進むと最後までそれは消えることなく光沢にもくもりが残り鏡の様な光沢にはならないのです。これは手磨きでも機械で磨いても、ロボットで磨いても同じです。最後は長い経験で培った人の目と技がその鏡の様な光沢を生み出すのです。

また次回の石屋のイロハもお楽しみに。



↑従来石の磨きに使用していた「角砥石」 粒度を示す番数は現在と同じ。



↑「角砥石」を3つ固定し、モーターで回して研磨していた時代の工具。



【齋藤繁樹】 ↑現代の石材研磨用砥石。粒度によって素材と形状が違っている。

暮らしに石を(6)

今回は「カードホルダー犬」(大理石製)のご紹介です。

犬の口にカードやメモを挟むことができるので、ご自宅の玄関やキッチンなどに置いて、家族へのメッセージを挟んでおくと、便利でとてもかわいいです。店舗では名刺などを挟んで店頭に置いてもらうのもアリです！



編集後記

今号もお読みいただきありがとうございました。一面でご紹介のありました通り、この度代表取締役になりましたが、編集長でもあります。ニューズレターに関しては皆様に楽しんでいただける紙面を目指して参りますので今後ともよろしくお願ひ致します。
ではまた。

【齋藤 勇介】

このニューズレターに関するお問い合わせ・ご意見・ご要望はこちらまでお願いします。
お届け先の変更や、ニューズレター送付不要の際もお知らせいただければ幸いです。(担当: 齋藤 勇介)

(有) 齋藤石材店 〒950-3321 新潟市北区葛塚4804 Tel:025-386-3491 Fax:025-386-3493
E-mail:saitougs@beach.ocn.ne.jp ホームページ:http://www.saitougs.com/